

藪の中

芥川龍之介



檢非違使に問はれたる木樵りの物語

さやうでございませう。あの死骸を見つけたのは、わたしに違ひございませぬ。わたしは今朝何時もの通り、裏山の杉を伐りに参りました。すると山陰の藪の中に、あの死骸があつたのでございませう。あつた所でございませうか？ それは山科の驛路からは、四五町程隔たつて居りませう。竹の中に瘦せ杉の交つた、人氣のない所でございませう。

死骸は縹の水干に、都風のさび烏帽子をかぶつた儘、仰向けに倒れて居りました。何しろ一刀とは申すものの、胸もとの突き傷でございませうから、死骸のまはりの竹の落葉は、蘇芳に滲みたやうでございませう。いえ、血はもう流れては居りませぬ。傷口も乾いて居つたやうでございませう。おまけに其處には、馬蠅が一匹、わたしの足音も聞えないやうに、べつたり食ひついて居りましたつけ。

太刀か何かは見えなかつたか？ いえ、何もござ

いませぬ。唯その側の杉の根がたに、繩が一筋落ちて居りました。それから、——さうさう、繩の外にも櫛が一つございませう。死骸のまはりにあつたものは、この二つぎりでございませう。が、草や竹の落葉は、一面に踏み荒されて居りましたから、きつとあの男は殺される前に、餘程手痛い働きでも致したのに違ひございませぬ。何、馬はゐなかつたか？ あそこは一體馬なぞには、はひれない所でございませう。何しろ馬の通ふ路とは、藪一つ隔たつて居りませうから。

檢非違使に問はれたる旅法師の物語

あの死骸の男には、確かに昨日遇つて居ります。昨日の、——さあ、午頃でございませう。場所は關山から山科へ、参らうと云ふ途中でございませう。あの男は馬に乗つた女と一しよに、關山の方へ歩いて参りました。女は牟子を垂れて居りましたから、

顔はわたしにはわかりません。見えたのは唯萩重ねらしい、衣の色ばかりでございませう。馬は月毛の、——確かに法師髪の馬のやうでございませう。丈でございませうか？ 丈は四寸もございませうか？ ——

何しろ沙門の事でございませうから、その邊ははつきり存じませう。男は、——いえ、太刀も帯びて居れば、弓矢も携へて居りました。殊に黒い塗り籠へ、二十あまり征矢をさしたの、唯今でもはつきり覚えて居ります。

あの男がかやうになろうとは、夢にも思はずに居りましたが、まことに人間の命などは、如露亦如電に違ひございませう。やれやれ、何とも申しやうのない、氣の毒な事を致しました。

檢非違使に問はれたる放免の物語

わたしが搦め取つた男でございませうか？ これ は確かに多襄丸と云ふ、名高い盗人でございませう。

尤もわたしが搦め取つた時には、馬から落ちたのでございませう、粟田口の石橋の上に、うんうん呻つて居りました。時刻でございませうか？ 時刻は昨夜の初更頃でございませう。何時ぞやわたしが捉へ損じた時にも、やはりこの紺の水干に、打出しの太刀を佩いて居りました。唯今はその外にも御覽の通り、弓矢の類さへ携へて居ります。さやうでございませうか？ あの死骸の男が持つてゐたのも、——では人殺しを働いたのは、この多襄丸に違ひございませう。革を巻いた弓、黒塗りの籠、鷹の羽の征矢が十七本、——これは皆、あの男が持つてゐたものでございませう。はい、馬も仰有る通り、法師髪の月毛でございませう。その畜生に落されるとは、何かの因縁に違ひございませう。それは石橋の少し先に、長い端綱を引いた儘、路ばたの青芒を食つて居りました。

この多襄丸と云ふやつは、洛中に徘徊する盗人の中でも、女好きのやつでございませう。昨年秋鳥部寺の寶頭廬の後の山に、物語でに來たらしい女房が一人、女の童と一しよに殺されてゐたのは、

こいつの仕業だとか申して居りました。その月毛に乗つてゐた女も、こいつがあつた男を殺したとなれば、何處へどうしたかわかりません。差出がましようございますが、それも御詮議下さいまし。

語 檢非違使に問はれたる媼の物

はい、あの死骸は手前の娘が、片附いた男でございます。が、都のものではございませぬ。若狭の國侍の侍でございます。名は金澤の武弘、年は二十六歳でございます。いえ、優しい氣立でございます。すから、遺恨なぞ受ける筈はございません。

娘でございますか？ 娘の名は眞砂、年は十九歳でございます。これは男にも劣らぬ位勝氣の女でございますが、まだ一度も武弘の外には、男を持つた事はございません。顔は色の淺黒い、左の眼尻に黒子のある、小さい瓜實顔でございます。

武弘は昨日娘と一しよに、若狭へ立つたのでございませぬ。

ございますが、こんな事になりますとは、何と云ふ因果でございます。しかし娘はどうなりましたやら、婿の事はあきらめましても、これだけは心配でなりません。どうかこの姥が一生のお願ひでございますから、たとひ草木を分けましても、娘の行方をお尋ね下さいまし。何に致せ憎いのは、その多襄丸とか何とか申す、盗人のやつでございます。婿ばかりか、娘までも、……（跡は泣き入りて言葉なし。）

多襄丸の白状

あの男を殺したのはわたしです。しかし女は殺しはしません。では何處へ行つたのか？ それはわたしにもわからないのです。まあ、お待ちなさい。いくら拷問にかけられても、知らない事は申されません。その上わたしもかうなれば、卑怯な隠し立てはしないつもりです。

わたしは昨日の午少し過ぎ、あの夫婦に出會ひました。その時風の吹いた拍子に、牟子の垂絹が上つたものですから、ちらりと女の顔が見えたのです。ちらりと、——見えたと思ふ瞬間には、もう見えなくなつたのですが、一つにはその爲もあつたのでせう、わたしにはあの女の顔が、女菩薩のやうに見えたのです。わたしはその咄嗟の間に、たとひ男は殺しても、女は奪はうと決心しました。

何、男を殺すなどは、あなた方の思つてゐるやうに、大した事ではありません。どうせ女を奪ふとなれば、必、男は殺されるのです。唯わたしは殺す時に、腰の太刀を使ふのですが、あなた方は太刀を使はない、唯權力で殺す、金で殺す、どうかするとお爲ごかしの言葉だけでも殺すでせう。成程血は流れない、男は立派に生きてゐる、——しかしそれで殺したのです。罪の深さを考へて見れば、あなた方が悪いか、わたしが悪いか、どちらが悪いかわかりません。(皮肉なる微笑)

しかし男を殺さずとも、女を奪ふ事が出来れば、別に不足はない譯です。いや、その時の心もちで

は、出来るだけ男を殺さずに、女を奪はうと決心したのです。が、あの山科の驛路では、とてもそんな事は出来ません。そこでわたしは山の中へ、あの夫婦をつれこむ工夫をしました。

これも造作はありません。わたしはあの夫婦と途づれになると、向うの山には古塚がある、その古塚を發いて見たら、鏡や太刀が澤山出た、わたしは誰も知らないやうに、山の陰の藪の中へ、さう云ふ物を埋めてある、もし望み手があるならば、どれでも安い値に賣り渡したい、——と云ふ話をしたのです。男は何時かわたしの話に、だんだん心を動かし初めました。それから、——どうです、慾と云ふものは、恐しいではありませんか？ それから半時もたたない内に、あの夫婦はわたしと一しよに、山路へ馬を向けてゐたのです。

わたしは藪の前へ來ると、寶はこの中に埋めてある、見に来てくれと云ひました。男は慾に渴いてゐますから、異存のある筈はありません。が、女は馬も下りずに、待つてゐると云ふのです。又あの藪の茂つてゐるのを見ては、さう云ふのも無理はありま

すまい。わたしはこれも實を云へば、思ふ壺にはまつたのですから、女一人を残した儘、男と藪の中へはひりました。

藪は少時の間は竹ばかりです。が、半町程行つた所に、やや開いた杉むらがある、——わたしの仕事を仕遂ぐるのには、これ程都合の好い場所はありません。わたしは藪を押し分けながら、實は杉の下に埋めてあると、尤もらしい謙をつきました。男はわたしにさう云はれると、もう瘦せ杉が透いて見える方へ、一生懸命に進んで行きます。その内に竹が疎らになると、何本も杉が竝んでゐる、——わたしは其處へ來るが早いから、いきなり相手を組み伏せました。男も太刀を佩いてゐるだけに、力は相當にあつたやうですが、不意を打たれてはたまりません。忽ち一本の杉の根がたへ、括りつけられてしまひました。繩ですか？ 繩は盗人の難有さに、何時扉を越えるかわかりませんから、ちやんと腰につけてゐたのです。勿論聲を出させない爲にも、竹の

落葉を頬張らせれば、外に面倒はありません。

わたしは男を片附けてしまふと、今度は又女の

所へ、男が急病を起したらしいから、見に來てくれと云ひに行きました。これも圖星に當つたのは、申し上げるまでもありません。女は市女笠を脱いだ儘、わたしに手をとられながら、藪の奥へはひつて來ました。所が其處へ來て見ると、男は杉の根に縛られてゐる、——女はそれを一目見るなり、何時の間に懷から出してゐたか、きらりと小刀を引き抜きました。わたしはまだ今までに、あの位氣性の烈しい女は、一人も見え事がありません。もしその時でも油斷してゐたらば、一突きに脾腹を突かれたでせう。いや、それは身を躲した所が、無二無三に斬り立てられる内には、どんな怪我也仕兼ねなかつたのです。が、わたしも多襄丸ですから、どうにかかうにか太刀も抜かずに、とうとう小刀を打ち落しました。いくら氣の勝つた女でも、得物がなければ仕方がありません。わたしはどうとう思ひ通り、男の命は取らずとも、女を手に入れる事は出來たのです。

男の命は取らずとも、——さうです。わたしはその上にも、男を殺すつもりはなかつたのです。所が

泣き伏した女を後に、藪の外へ逃げようとすると、女は突然わたしの腕へ、氣違ひのやうに縋りつきました。しかも切れ切れに叫ぶのを聞けば、あなたが死ぬか夫が死ぬか、どちらか一人死んでくれ、二人の男に恥を見せるのは、死ぬよりもつらいと云ふのです。いや、その内どちらにしろ、生き残つた男につれ添ひたい、——さうも喘ぎ喘ぎ云ふのです。わたしはその時猛然と、男を殺したい氣になりました。(陰鬱なる興奮)

こんな事を申し上げると、きつとわたしはあなた方より残酷な人間に見えるでせう。しかしそれはあなたの方が、あの女の顔を見ないからです。殊にその一瞬間の、燃えるやうな瞳を見ないからです。わたしは女と眼を合せた時、たとひ神鳴に打ち殺されても、この女を妻にしたいと思ひました。妻にしたい、——わたしの念頭にあつたのは、唯かう云ふ一事だけです。これはあなた方の思ふやうに、卑しい色慾ではありません。もしその時色慾の外に、何も望みがなかつたとすれば、わたしは女を蹴倒しても、きつと逃げてしまつたでせう。男もさうすれ

ばわたしの太刀に、血を塗る事にはならなかつたのです。が、薄暗い藪の中に、ちつと女の顔を見た刹那、わたしは男を殺さない限り、此處は去るまいと覺悟しました。

しかし男を殺すにしても、卑怯な殺し方はしたくありません。わたしは男の繩を解いた上、太刀打ちをしると云ひました。(杉の根がたに落ちてゐたのは、その時捨て忘れた繩なのです。)男は血相を變へた儘、太い太刀を引き抜きました。と思ふと口も利かずに、憤然とわたしへ飛びかかりました。——その太刀打ちがどうなつたかは、申し上げるまでもありますまい。わたしの太刀は二十三合目に、相手の胸を貫きました。二十三合目に、——どうかそれを忘れずに下さい。わたしは今でもこの事だけは、感心だと思つてゐるのです。わたしと二十合斬り結んだものは、天下にあの男一人だけです。ら。(快活なる微笑)

わたしは男が倒れると同時に、血に染まつた刀を下げたなり、女の方を振り返りました。すると、——どうです、あの女は何處にもゐないではありません

せんか？ わたしは女がどちらへ逃げたか、杉むらの間を探して見ました。が、竹の落葉の上には、それらしい跡も残つてゐません。又耳を澄ませて見ても、聞えるのは唯男の喉に、斷末魔の音がするだけです。

事によるとあの女は、わたしが太刀打を始めるが早いか、人の助けでも呼ぶ爲に、藪をくぐつて逃げたのかも知れない。——わたしはさう考へると、今度はわたしの命ですから、太刀や弓矢を奪つたなら、すぐに又もとの山路へ出ました。其處にはまだ女の馬が、靜かに草を食つてゐます。その後の事は申し上げるだけ、無用の口數に過ぎますまい。唯、都へはいる前に、太刀だけはもう手放してゐました。——わたしの白状はこれだけです。どうせ一度は櫓の梢に、懸ける首と思つてゐますから、どうか極刑に遇はせて下さい。(昂然たる態度)

清水寺に来れる女の懺悔

——その紺の水干を着た男は、わたしを手ごめにしてしまふと、縛られた夫を眺めながら、嘲るやうに笑ひました。夫はどんなに無念だつたでせう。が、いくら身悶えをしても、體中にかかつた縄目は、一層ひしひしと食ひ入るだけです。わたしは思はず夫の側へ、轉ぶやうに走り寄りました。いえ、走り寄らうとしたのです。しかし男は咄嗟の間に、わたしを其處へ蹴倒しました。丁度その途端です。わたしは夫の眼の中に、何とも云ひやうのない輝きが、宿つてゐるのを覺りました。何とも云ひやうのない、——わたしはあの眼を思ひ出すと、今でも身震ひが出ずにはゐられません。口さへ一言も利けない夫は、その利那の眼の中に、一切の心を傳へたのです。しかも其處に閃いてゐたのは、怒りでもなければ悲しみでもない、——唯わたしを蔑んだ、冷たい光だつたではありませんか？ わたしは男に蹴られたよりも、その眼の色に打たれたやうに、我知らず何か叫んだぎり、とうとう氣を失つてしまひました。

その内にやつと氣がついて見ると、あの紺の水干

の男は、もう何處かへ行つてゐました。跡には唯杉の根がたに、夫が縛られてゐるだけです。わたしは竹の落葉の上に、やつと體を起したなり、夫の顔を見守りました。が、夫の眼の色は、少しもさつきと變りません。やはり冷たい蔑みの底に、憎しみの色を見せてゐるのです。恥しき、悲しき、腹立たしき、——その時のわたしの心の中は、何と云へば好いかわかりません。わたしはよろよろ立ち上りながら、夫の側へ近寄りました。

「あなた。もうかうなつた上は、あなたと御一しよには居られません。わたしは一思ひに死ぬ覺悟です。しかし、——しかしあなたもお死になすつて下さい。あなたはわたしの恥を御覽になりました。わたしはこのままあなた一人、お残り申す譯には参りません。」

わたしは一生懸命に、これだけの事を云ひました。それでも夫は忌はしきうに、わたしを見つめてゐるばかりなのです。わたしは裂けさうな胸を抑へながら、夫の太刀を探しました。が、あの盗人に奪はれたのでせう、太刀は勿論弓矢さへも、藪の中に

は見當りません。しかし幸ひ小刀だけは、わたしの足もとに落ちてゐるのです。わたしはその小刀を振り上げると、もう一度夫にかう云ひました。「ではお命を頂かせて下さい。わたしもすぐにお供します。」

夫はこの言葉を聞いた時、やつと唇を動かしました。勿論口には笹の落葉が、一ぱいにつまつてゐますから、聲は少しも聞えませんが、わたしはそれを見ると、忽ちその言葉を覺りました。夫はわたしを蔑んだ儘、「殺せ」と一言云つたのです。わたしは殆、夢うつつの内に、夫の縹の水干の胸へ、ずぶりと小刀を刺し通しました。

わたしは又この時も、氣を失つてしまつたのでせう。やつとあたりを見まはした時には、夫はもう縛られた儘、とうに息が絶えてあました。その蒼ざめた顔の上には、竹に交つた杉むらの空から、西日が一寸落ち落ちてゐるのです。わたしは泣き聲を呑みながら、死骸の繩を解き捨てました。さうして、——さうしてわたしがどうなつたか？ それだけはもうわたしには、申し上げる力もありません。兎に

角わたしはどうしても、死に切る力がなかつたのです。小刀を喉に突き立てたり、山の裾の池へ身を投げたり、いろいろな事もして見ましたが、死に切れずにかうしてゐる限り、これも自慢にはなりません。(寂しき微笑) わたしのやうに腑甲斐ないものは、大慈大悲の觀世音菩薩も、お見放しなすつたものかも知れません。しかし夫を殺したわたしは、盗人の手ごめに遇つたわたしは、一體どうすれば好いのでせう? 一體わたしは、——わたしは、——(突然烈しき敵愾)

語 巫女の口を借りたる死霊の物

——盗人は妻を手ごめになると、其處へ腰を下した儘、いろいろ妻を慰め出した。おれは勿論口は利けない。體も杉の根に縛られてゐる。が、おれはその間に、何度も妻へ目くばせをした。この男の云ふ事を眞に受けるな、何を云つても謙と思へ、——お

れはそんな意味を傳へたいと思つた。しかし妻は悄然と笹の落葉に坐つたなり、ぢつと膝へ目をやつてゐる。それがどうも盗人の言葉に、聞き入つてゐるやうに見えるではないか? おれは妬しさに身悶えをした。が、盗人はそれからそれへと、巧妙に話を進めてゐる。一度でも肌身を汚したとなれば、夫との仲も折り合ふまい。そんな夫に連れ添つてゐるより、自分の妻になる氣はないか? 自分はいとしいと思へばこそ、大それた眞似も働いたのだ、——盗人はとうとう大膽にも、さう云ふ話さへ持ち出した。

盗人にかう云はれると、妻はうつとりと顔を擡げた。おれはまだあの時程、美しい妻は見た事が無い。しかしその美しい妻は、現在縛られたおれを前に、何と盗人に返事をしたか? おれは中に迷つてゐても、妻の返事を思ひ出す毎に、嗔恚に燃えなかつたためしはない。妻は確かにかう云つた、——「では何處へでもつれて行つて下さい。」(長き沈黙) 妻の罪はそれだけではない。それだけならばこの闇の中に、今程おれも苦しみはしまい。しかし妻

は夢のやうに、盗人に手をとられながら、藪の外へ行かうとすると、忽ち顔色を失つたなり、杉の根のおれを指さした。「あの人を殺して下さい。わたしはあの人が生きてゐては、あなたと一しよにはゐられません。」——妻は氣が狂つたやうに、何度もかう叫び立てた。「あの人を殺して下さい。」——この言葉は嵐のやうに、今でも遠い闇の底へ、まつ逆様におれを吹き落さうとする。一度でもこの位憎むべき言葉が、人間の口を出た事があらうか？ 一度でもこの位呪はしい言葉が、人間の耳に觸れた事があらうか？ 一度でもこの位、——(突然逆逆如き嘲笑) その言葉を聞いた時は、盗人さへ色を失つてしまつた。「あの人を殺して下さい。」——妻はさう叫びながら、盗人の腕に縋つてゐる。盗人はちつと妻を見た儘、殺すとも殺さぬとも返事をしな

い。——と思ふか思はない内に、妻は竹の落葉の上へ、唯、一蹴りに蹴倒された、(再、逆逆如き嘲笑) 盗人は靜かに兩腕を組むと、おれの姿へ眼をやつた。「あの女はどうするつもりだ？ 殺すか、それとも助けてやるか？ 返事は唯頷けば好い。殺す

か？」——おれはこの言葉だけでも、盗人の罪は赦してやりたい。(再、長き沈黙)

妻はおれがためらふ内に、何か一聲叫ぶが早いか、忽ち藪の奥へ走り出した。盗人も咄嗟に飛びかかつたが、これは袖さへ捉へなかつたらしい。おれは唯、幻のやうに、さう云ふ景色を眺めてゐた。

盗人は妻が逃げ去つた後、太刀や弓矢を取り上げると、一箇所だけおれの繩を切つた。「今度はおれの身の上だ。」——おれは盗人が藪の外へ、姿を隠してしまふ時に、かう呟いたのを覚えてゐる。その跡は何處も靜かだつた。いや、まだ誰かの泣く聲がする。おれは繩を解きながら、ちつと耳を澄ませて見た。が、その聲も氣がついて見れば、おれ自身の泣いてゐる聲だつたではないか？ (三度、長き沈黙)

おれはやつと杉の根から、疲れ果てた體を起した。おれの前には妻が落した、小刀が一つ光つてゐる。おれはそれを手にとると、一突きにおれの胸へ刺した。何か腥い塊がおれの口へこみ上げて來る。が、苦しみは少しもない。唯胸が冷たくなると、一

層あたりがしんとしてしまつた。ああ、何と云ふ静かさだらう。この山陰の藪の空には、小鳥一羽囀りに來ない。唯杉や竹の杪に、寂しい日影が漂つてゐる。日影が、——それも次第に薄れて來る。もう杉や竹も見えない。おれは其處に倒れた儘、深い静かさに包まれてゐる。

その時誰か忍び足に、おれの側へ來たものがある。おれはそちらを見ようとした。が、おれのまはりには、何時か薄闇が立ちこめてゐる。誰か、——その誰かは見えない手に、そつと胸の小刀を抜いた。同時におれの口の中には、もう一度血潮が溢れて來る。おれはそれぎり永久に、中有の闇へ沈んでしまつた。……………

(大正十年十二月作)

底本：「現代日本文学全集 第三〇篇 芥川龍之介集」改造社

1928（昭和3）年1月9日発行

初出：「新潮」

1922（大正11）年1月1日

※表題は底本では、「藪《やぶ》の中《なか》」となっています。

入力：高柳典子

校正：岡山勝美

2012年2月8日作成

2012年3月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。